

繁華街の機能・空間集積と持続的コミュニティに関する研究 その4

日大生産工(院) ○宮尾 直希 日大生産工(院) 川原 隆平
日大生産工(院) 荻野 汐香 日大生産工 北野 幸樹

1. 研究の背景と目的

現在の日本は、少子高齢化による生産年齢人口減少により、都市における高齢化、独居化が進んでいる。それに伴い孤独死の増加が社会問題となっている。商業機能が集積されている空間を繁華街や商店街としているが、現在の繁華街は、コロナ禍によるオンラインショッピングの主流化、繁華街・商店街の利用者の低下、商店街の空き店舗の増加・放置などにより商店街が衰退している。商業機能が衰退している繁華街や商店街を、単なる買い物をする場としてだけでなく地域コミュニティの形成など長い時間をかけて築かれた存在意義や地域資産としての価値を再度評価し、繁華街・商店街のこれからのあり方について検討することが求められる。

表1 アンケート配布場所と性別

アンケートの依頼を受けた場所(人)	性別 (人)
ゴールデン街 28	男性 39
医大通り 24	女性 23
その他 10	その他 0
合計 62	合計 62

2. 調査概要

調査は、新宿ゴールデン街、医大通り商店街に訪れていた来街者、SNS利用者に対してアンケートによる調査を行った。調査方法は、繁華街やSNSでアンケートを配布し、記載されているQRコードを読み取り、Google Form(2022年5月~8月)に回答していただくことでデータを集計した。

3. 繁華街の利用者について

居住地周辺のほかに利用する繁華街があると答えた人は、51.6%であり、ないと答えた人は、45.2%であった。繁華街利用者は、約半数であり、居住地周辺の繁華街を利用する人とよく利用する繁華街がある人がいることがわかった。

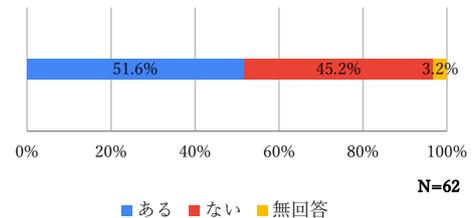


図1 よく利用する繁華街の有無

表2 居住地周辺以外の繁華街 (N=59)

東京都		東中野ムーンロード	1
ゴールデン街	2	八王子駅周辺	3
医大通り商店会	2	神奈川県	
歌舞伎町	3	日吉駅周辺	1
新宿駅周辺	1	浜銀通り	1
荒木町	2	稲浜ショップ	1
高田馬場駅周辺	2	横須賀駅周辺	1
代々木のれん街	1	横浜駅周辺	1
サンシャイン通り	1	下北沢	1
池袋駅周辺	4	千葉県	
成城学園駅前	2	千葉駅前	1
石神井公園	1	船橋駅	1
浅草	1	津田沼駅周辺	1
ソラマチ	1	北習志野商店街	1
両国駅周辺	1	埼玉県	
錦糸町駅周辺	1	西川口駅周辺	1
学芸大学駅周辺	1	赤羽駅周辺	2
渋谷	1	飯能駅周辺	1
神泉	1	本川越	1
国分寺駅前	1	大宮駅周辺	2
三角地帯	1	サンロード	1
十条銀座商店街	1	愛知県	
昭島駅周辺	1	大須商店街	1
ルック商店街	1	大阪府	
大山商店街	2	道頓堀	1
		無回答	3

表3 居住地以外によく利用する繁華街 (n=33)

東京都		西日暮里	1
ゴールデン街	1	銀座	1
医大通り商店会	10	吉祥寺	1
歌舞伎町	4	バスケットロード	1
新宿駅周辺	6	三角地帯	2
思い出横丁	1	ルック商店街	1
池袋駅周辺	1	神奈川県	
渋谷	3	新百合ヶ丘駅周辺	1
四谷三丁目	1	横浜	2
中野ブロードウェイ	1	千葉県	
中野アーケード	1	船橋	1
立川駅周辺	1	大阪府	
浅草	2	梅田	1

Study on Relationship between Downtown Function, Spatial Concentration and Sustainable Community Part4

Naoki MIYAO, Ryuhei KAWAHARA, Shioka OGINO, and Koki KITANO

4. 繁華街に対する満足度評価の比較

来街者の繁華街に対する満足度について以下にまとめる。来街者に対し、繁華街の満足度について5段階評価で調査を行った。5段階評価は、数字の値が高いと満足度が高くなることを示し、低いと満足度が低いことを示している。

繁華街の評価として居住地周辺の繁華街とよく利用する繁華街双方において、「交通アクセス」、「買い物・利用」、「賑わい」の満足度の値が高い傾向が見られた。「交通アクセス」において、繁華街が位置する場所は主要な線路沿いにある傾向から、双方の繁華街において満足度が高い値となったといえる。その中で、よく利用する繁華街の満足度の値を満足とする人が居住地周辺の繁華街の満足度の割合より約10%高くなった。上記の結果の要因として、居住地周辺の繁華街は、交通機関を使わずにアクセスすることができるため、交通アクセスについての意識が薄いからであると考えられる。買い物・利用は、よく利用する繁華街の満足度の方に満足の評価をつける人の割合が居住地周辺の繁華街の満足度より約30%大きくなった。この結果となった理由として、よく利用するとされる繁華街は、日常的な買い物のほかに来街者にとって目的のものがそろう店舗の多い場所であることが考えられる。「賑わい」についてもよく利用する繁華街の満足度の方に満足の評価をつける人が多くその差は約20%であった。上記の結果の要因として考えられることは、よく利用する繁華街は、日常的な買い物をする人が多いことに加えて、目的のものがそろう店舗が多いためその分、来街者の人数が多くなる傾向にあると考える。繁華街に対する満足度について、低い評価となった項目は、「景観」、「安全・安心」の評価であった。「安心・安全」の評価は、居住地周辺の繁華街の満足度で不満足やどちらかというとな満足の評価をつける人が多く、よく利用する繁華街の満足度より約17%大きくなった。上記の結果となった要因として居住地周辺の繁華街は、自身の暮らしている街やその周辺にあり、生活により近い場所に位置しているため、よく利用する繁華街よりも安心・安全に対する意識が大きくなるのではないかと考える。「景観」は、よく利用する繁華街の満足度の評価がどちらかというとな満足の評価をする人が、居住地周辺の繁華街の評価よりも約5%割合が大きくなった。上記の結果の要因として、よく利用する繁華街での景観は、

いつも見る景観より特別感をもって見るため景観について少し敏感に見るからでないかと考える。

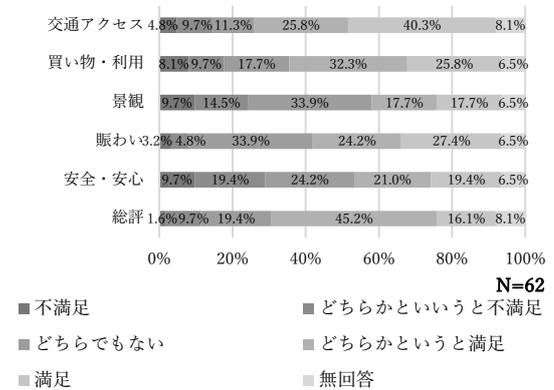


図2 満足度調査
(居住地周辺の繁華街)

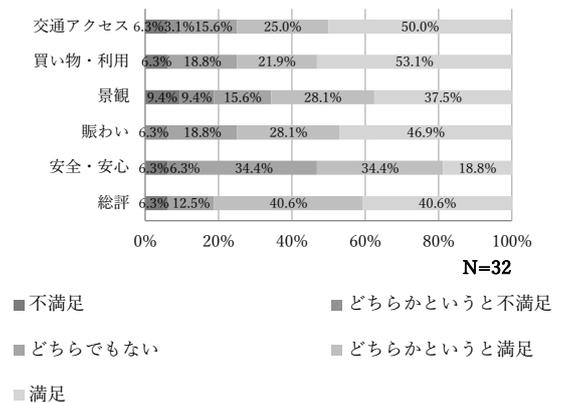


図3 満足度調査
(よく利用する繁華街)

5. 繁華街利用の目的

繁華街で最も多い利用目的はランチやディナーなどの外食で73.2%となった。2番目に多い利用目的は、生活必需品の買い物で64.3%となった。3番目には、夏祭りやイルミネーションなどのイベントで17.9%、4番目には、観光スポット目的として14.3%の人が利用していることがわかった。

繁華街に求める最も多い環境・空間は、同じ趣味や興味を持つ人と出会える環境・空間で75.8%、2番目に自然が多く、のんびりと過ごすことができる環境・空間が61.3%、3番目多世代、多国籍な人々で賑わう環境・空間で56.5%の人が求めている傾向がみられた。

繁華街の利用目的は、主に生活の中で行われる、食事、買い物といった日々の営みが多く、時々行われる非日常的なイベントのために繁華街を利用していることがわかった。

対して繁華街に求める環境・空間は、同じ趣味を持つ人との出会い、多世代、多国籍が賑わう空間といった他者との交流を行うことができる環境・空間を求める人が多い傾向がみられた。

現在の繁華街で、求める環境・空間を実現させるには、食事、買い物といった日々の営みの中に、多世代、多国籍の人々を受け入れるようにすることで多様な人種、年齢の人々が繁華街で交流するべきであると考え。よく利用する繁華街の有無は、あると答えた人は51.6%で、ないと答えた人は45.2%と半数の人が居住地域に限らず活動している傾向がみられた。

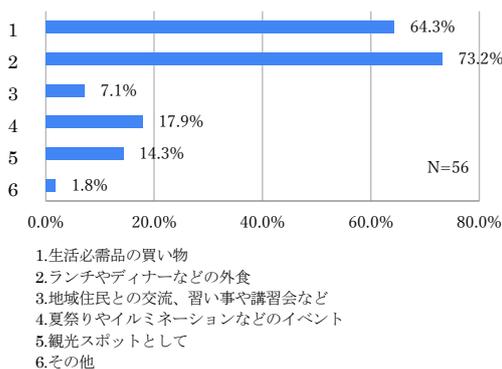


図4 繁華街の利用目的

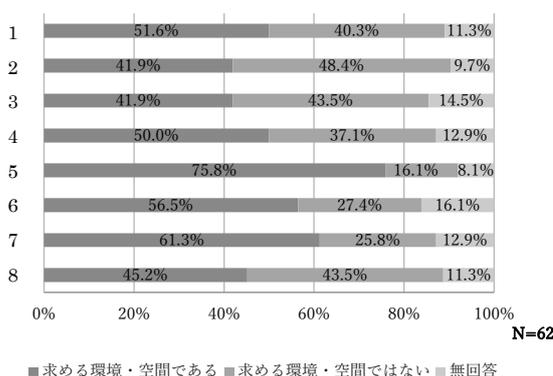


図5 繁華街に求める環境・空間

6. 繁華街の位置付け

繁華街の位置付けは、今も昔も街の中心の割合が66.1%であり、続いて昔は街の中心であったが今は賑わっていないが14.5%であった。繁華街の位置付けは、今も昔も街の中心を感じている人が多いことがわかった。

今も昔も街の中心となる繁華街は、交通アクセスがよく、人が集まり食事や生活必需品の買い物を今も行う場所が繁華街であるといえる。対して、昔は街の中心であったが今はあまり賑わっていない繁華街は、オンラインショッピングの主流化や利用目的となる店がないなどの要因が、繁華街の利用低下につながっているといえる。今後の繁華街は、地域の人々が求める空間・環境に答えた商業空間、地域コミュニティの増加が必要であると考え。今も昔もあまり賑わっていないと答える人は、4.8%であった。

昔から賑わっていない今も賑わっていない繁華街は、限定された利用者が繁華街を利用し、少ない利用者であっても繁華街で存続できるような繁華街であるといえる。昔は賑わっていなかったが今は賑わっている繁華街は、1.6%となっており、割合は、ほかに比べて低い値である。

このように、低い値となった大きな要因として、オンラインショッピングの主流化による、繁華街の存在意義や価値が失われている。もともと賑わいのない繁華街が、賑わいを創出することは難しいと考える。

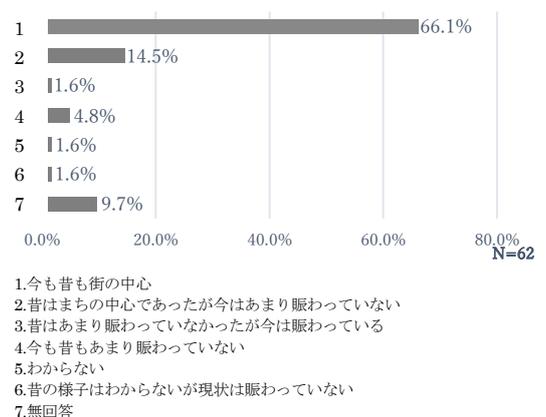


図6 居住地域周辺の繁華街の位置付け

7. 繁華街を誰と利用するか

居住地周辺の繁華街で共に利用する相手として最も多い割合は、家族が43.3%、

友人が38.2%、恋人が46.7%、仕事仲間が29.4%であった。よく行く繁華街で最も多く利用する相手の割合は、家族が50.0%、友人が31.4%、恋人が46.7%、後輩が10.0%、仕事仲間が44.4%であった。

繁華街の利用相手は、居住地周辺とよく利用する繁華街の双方において近い割合となった。しかし、よく利用する繁華街では、後輩との利用が約10%あり、居住地周辺よりも後輩との繁華街利用がわずかであるが多くなることが分かった。また、家族、恋人との利用が約50%近くとなり、日常生活と密接な関係を持つ相手との利用が多いことが分かった。

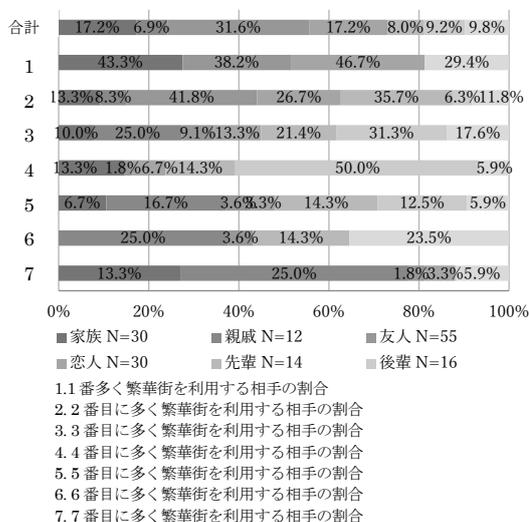


図 7-1 繁華街をともに利用する相手の割合 (居住地周辺の繁華街)

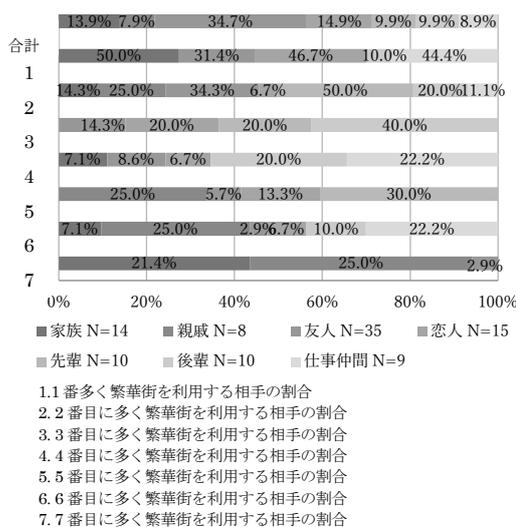


図 7-2 繁華街をともに利用する相手の割合 (よく利用する繁華街)

8. まとめ

本研究で得られた繁華街の価値と持続的なまちづくりについて得られた基礎的知見を以下に整理する。

- 1) 繁華街の満足度は、「交通アクセス」、「買い物・利用」「賑わい」の評価が高い値となった。このことから、繁華街は利用者がアクセスしやすく、日常的な買い物利用ができる環境や空間となると人が集まり賑わいが生まれる傾向であるといえる。
- 2) 繁華街を利用する人は、食事や生活必需品の購入といった日常生活に深く結びついている。繁華街の持続性を考える上では、地域コミュニティの核としての繁華街をさらに考える必要がある。
- 3) 今後の繁華街に求められる環境・空間は、同じ趣味を共有する場や、多世代、多国籍の人との交流の場としての繁華街である。さらに、自然が多く、のんびりと過ごすことができる環境・空間を求める人も多い。繁華街は、商業機能が集積されてできる空間であるが、商業機能が衰退している今、豊かな自然を繁華街の空間に作り、そこで、人々の交流が出来るような空間づくりが必要である。
- 4) 繁華街の利用者は、日常的な買い物以外で非日常的なイベントの参加を目的としている。繁華街の持続性について考えるとき、非日常的なイベントによる賑わいにより地域居住者の参加や観光スポットとしての繁華街の役割も必要となる。

参考文献

- 1) 木下惇, 北野幸樹: 繁華街の機能・空間集積と持続的コミュニティ関係と生活に関する研究, 日本大学生産工学部第53回学術講演会概要, pp. 389-392, 2020. 12
- 2) 荻野汐香, 北野幸樹: 繁華街の機能・空間集積と持続的コミュニティ関係と生活に関する研究その2, 日本大学生産工学部第54回学術講演会概要, pp. 563-566, 2021. 12
- 3) 木下惇, 北野幸樹: 繁華街の機能・空間集積と持続的コミュニティ関係と生活に関する研究その3, 日本大学生産工学部第54回学術講演会概要, pp. 567-570, 2021. 12